

図書館の雇用形態の多様化は、フィクションの作品でどのように扱われているか

——事例研究『みさと町立図書館分館』『図書館は、いつも静かに騒がしい』を中心に

日本語日本文化学科・教授

佐藤 毅彦

1. はじめに

「ゆくゆくは地元に戻って、図書館で働きたいなと思っています。老後とかに。本が好きなので」¹⁾と、2017年の「第46回NHK紅白歌合戦」に出演したアイドルグループ「欅坂46」²⁾のメンバーである、「長濱ねる」が、こたえていたことが報道された。個人撮影の写真集を刊行し、その売り上げが10万部を突破して、出身地で、写真集の撮影地でもある長崎で、記念イベントが開催され、そのイベント前のメディアに対する会見で、「今のお仕事をたくさん頑張った後」に続いて、冒頭のような発言があった。「長濱ねる」は、これまでも、図書館について、公式ブログや、インタビューなどで、図書館を利用したことや、図書館での利用行動について、しばしば言及してきている。³⁾そうした彼女の意識の中で、「本が好き」な人が「老後」に働く場所として、図書館が想定されているのである。図書館について、彼女の思い浮かべる業務の内容は、前述のような状況にある人物が十分に対応できるものだと、みられていることを示している。

「欅坂46」と同様に、秋元康がプロデュースに関わっている、関連グループ「乃木坂46」の選抜メンバーで、複数回にわたってセンターを経験してきている「西野七瀬」は、自らが専属モデルとなっている、雑誌『non・no』（2018年1月号）巻頭の特集記事に、他の専属モデルとともに掲載されている。⁴⁾その中には、書架に並んでいる本の背表紙にラベルが貼られ、一部の本には、「館内」を示す赤い丸ラベルがつけられている写真や、片手に本を持ち、もう一方の手を書架に伸ばしている写真が含まれている。これらは、図書館を背景として撮影されたと思われ、こうした設定が、雑誌の主な読者層である、10代後半から20代の女性にも、身近なものとして感じられ、一定の共感を得られるであろうとの雑誌制作者の思いが、このような写真が掲載される背景に存在しているといえるのではないか。

同じく「乃木坂46」の選抜メンバーである「井上小百合」は、雑誌『BRODY』（2017年10月号）で、グラビアに登場している。⁵⁾「駒込」において撮影された写真には、庭園「六義園」で撮影の写真とともに、アジア関係資料の専門図書館である「東洋文庫」の施設のひとつ「東洋文庫ミュージアム」の館内で撮影されたものも含まれていた。

また、「乃木坂46」は、結成当初、これも、秋元康がプロデュースを手がけている「AKB48」の公式ライバル」という設定で誕生したが、その「AKB48」は、毎年6月に「選抜総選挙」を実施してきている。2017年の選抜総選挙開票は、沖縄の野外ステージからの中継が予定されていたが、悪天候のために、室内での実施に変更された。選抜総選挙について伝えるメディアの中で、選挙の結果よりも大きな扱いで報道されたのが、メンバーの一人であり、

当日も参加していた「須藤凜々花」の「結婚宣言」であった。6)この「須藤凜々花」は、2016年刊行の雑誌『FLASH スペシャルグラビア BEST2016 盛夏号』に、図書館の書架の前で撮影した水着写真が掲載されたことで知られている。7)アイドルのグラビアでも、図書館で水着になった姿が雑誌に掲載されるケースは、それほど多くはないと思われるが、こうした設定での写真が使われた背景には、「哲学」という、当時「須藤凜々花」が標榜していたイメージ戦略の要素のひとつがあったと、考えることができるのではないかと。8)

このような例をみると、メディアの中でさまざまとりあげられ方を、アイドルについても、図書館とのかかわり方が、以前よりも多様化してきている、ということがいえよう。

注

1)「長浜ねる、将来の夢『地元に戻って図書館で働く』」『日刊スポーツ』2018.1.10
(<http://www.nikkansports.com/entertainment/news/201801100000560.html>)

2)紅白歌合戦では、メンバーの数人が、過呼吸のため倒れたことで、話題となった。

「櫻坂3人『過呼吸状態』NHK紅白」『朝日新聞』2018.1.1、p.38

3)公式ブログには「最近、自分の将来を妄想するのが楽しいです」「今はアイドルを頑張るのだけどね」「ゆくゆくは図書館で働きたいな〜とか。のんびり本に囲まれて過ごして本の修理したり 子どもたちに読み聞かせしたり その方に合わせてぴったりな本をおすすめしてみたり」(「煌き、233 2017.9.8」といった、今回の発言内容に近い記述もみられる。

(<http://www.keyakizaka46.com/s/k46o/diary/detail/11536?ima=0000&ct=member>)

インタビューでは「図書館の蔵書を読み尽くそうと、司書さんに顔を覚えられるほど通い詰めた」というエピソードが紹介されている。

「インタビュー あのひとと本の話 and more... 長濱ねる (櫻坂46)」『ダ・ヴィンチニュース』

(<http://ddnavi.com/interview/314421/a/>)

また、出演したラジオ番組のコメントでは「本を読むことが大好きで図書館に行ってます。すごい小さい頃から図書館にこもっていて、あの空間が好きで。東京にきてあんまり図書館があるって知らなくて、色々自分で調べていってます。なんかもう気づいたら3冊くらい読んじゃいますもん。熱中して。読むのはすごいはやいかもしれない(笑)入り込んだら周りの音が聞こえないくらい読んじゃいますね。ミステリー系が多いですね」といったものもあった。

『坂本美雨のディアフレンズ』(TOKYO FM) 2017.10.31

(<http://www.tfm.co.jp/dear/index.php?itemid=129987&catid=693>)

長崎市は、県庁所在地の自治体としては異例のことだが、長らく市立図書館を設置せず、公民館図書室による図書の貸出を実施し、その基盤となる業務を「長崎市図書センター」(延床面積795㎡『日本の図書館2007』p.190)の名称の施設で行ってきた。2007年9月に現

在の長崎市立図書館（延床面積 11,659 m²『日本の図書館 2008』p.178）が創設されている。

4) 「特集 冬は毎日『ふわもこニット』で可愛げ盛り！」『non・no』2018.1

5) 「井上小百合×駒込 乃木坂 46 Tokyo film」『BRODY』2017.10

6) 「AKB 総選挙最大のサプライズ『私、私、NMB 須藤凜々花は結婚します』」『日刊スポーツ』2017.6.18、p.1

開票翌日のこの記事は、一面トップに掲載され、ほぼ全面で、須藤凜々花に関連する内容が扱われている。また、記事の中では、当日の状況とともに、須藤凜々花について、「グループ加入前は偏差値 67 の高校生で将来の夢は哲学者」と書かれている。

7) 「NMB48 部門優勝！ 須藤凜々花は自由な子」『FLASH スペシャルグラビア BEST2016 盛夏号（FLASH 増刊）』2016.8

この撮影について紹介した記事の中には、「彼女が望んだ夢企画は図書館での撮影。なんと自宅の本棚から 20 冊もの哲学書を持参して登場した」と、するものがあつた。

(<http://news.dwango.jp/2016/08/03/99811/idol/>)

8) 須藤凜々花は、「政治社会学者・堀内進之介氏との対話篇で進む全 5 章+彼女自身のコラムで構成された、硬派でユニークな哲学本」と、出版社である幻冬舎のホームページで紹介されている、著書『人生を危険にさらせ』を刊行している。

(<http://www.gentosha.co.jp/book/b9672.html>)

須藤凜々花・堀内進之介『人生を危険にさらせ』幻冬舎、2016.3→幻冬舎文庫、2017.4

*なお、「長濱ねる」の表記については、各メディアでの扱いをそのまま記載した。

2. 図書館の登場する小説—2017

小説の中で、図書館や図書館員が扱われている作品は、例年、一定数、刊行されてきている。たとえば、2017 年には、翻訳作品で『図書館は逃走中』1) 『図書館島』2) などが話題となった。

日本の小説の中には、近年、図書館現場で進行している職員の雇用形態の多様化を反映している作品があり、今回は、これらを取り上げて検討した。その際に、現実の図書館サービスの中で、職員の専門性の中身が問われ、利用者とのコミュニケーションの取り方がポイントとなる「レファレンスサービス」「図書館内で生じる様々なトラブル」「利用者のクレーム・問題利用者への対応」などに注目して検証した。

1) デイヴィッド・ホワイトハウス：著 堀川志野舞：訳『図書館は逃走中』早川書房、2017.5

2) ソフィア・サマター：著 市田泉：訳『図書館島』東京創元社、2017.11

3. 高森美由紀『みさと町立図書館分館』1)

3-0. 高森美由紀

この本の著者である、高森美由紀について、『みさと町立図書館分館』のカバーには、「1980 年生まれ。派遣職員。青森県出身、在住。著作に『ジャパン・ディグニティ』（第 1 回暮ら

しの小説大賞受賞/産業編集センター)、『お手がみください』(産業編集センター)がある」と記載されている。その後、『花木荘のひとびと』2)で「2017年集英社ノベル大賞」を受賞している。

3-1. 図書館の概要

この作品には、具体的な地名は、ほとんど出てこない。3)前述の『みさと町立図書館分館』カバーに、作者が、「青森県出身、在住」とあり、三戸町立図書館のホームページで「三戸町在住の小説家」4)と紹介されている。「暮らしの小説大賞」受賞コメントでは、「ほとんど町内から出たことがない」とされており、作品中の登場人物の発言からも、著者の出身地の周辺を舞台としていると思われる。5)ストーリーに関しては、「トラブルにクレーム対応……そんな図書館業務でも、遥はまあまあ楽しんでいる」「図書館で働いているがゆえに、見えてくる『地域の人々の生活』に触れていく」などと紹介されている。6)

この小説のメインキャラクターである「山本遥」は、図書館の「一般室担当で三年目の契約職員」(p.6)であり、年齢は、「三十三です」(p.98)と自ら発言している。

彼女の「勤務先のみさと町立図書館・分館」は「四十年前に建てられた平屋のコンクリート造りで、規模は本館の半分ほど」「館内は土足禁止。正面玄関ホールを中心にして、東西に分かれており、東が一般室、西が児童室となっている」(pp.5-6)施設である。

図書館の開館前の業務については、「仕事は掃除から始まる」。「香山さんがロビーのごみを集めてモップがけをしている間に、私は玄関を掃いて、館内用スリッパにアルコールスプレーを吹きかける。その後、六紙取っている新聞から地元に関する記事を探してコピーし、壁に貼り出す。返却ボックスから本を回収。開館したら本の貸し出し返却、図書購入リスト作成、本の補修、未返却の督促電話、レファレンス、書架の整理などをする。月一回は各施設への配本、絵本の読み聞かせなどもある」(p.7)。「二十ばかりの机を拭いて、トイレ掃除をし、新聞からローカルニュースをピックアップしてコピーする」。「新聞六紙をバインダーに挟んで新聞コーナーにセットし、余裕があれば書架にハンディモップをかける。開館時間になったら、正面玄関の鍵を開け、外の返却ボックスから返却本を回収し、待ち構えている利用者と共に館内に入って業務スタートだ」(p.203)などと紹介されている。

図書館の利用者については、「平日の日中は暇である。静かである。分館が建った四十年前は人口も利用者も多かったのだろう」「辛うじて賑わうのは夕方五時半以降、閉館までの三十分間のみ。仕事や農作業帰りのひとが大半で、『現代農業』とか『簡単便利な保存食』などといった本をよく借りていく。日中の来館者は現役を退いたおじいさんやおじさんが四、五人程度。並ぶソファに足を組んで腰かけ、新聞を隅から隅まで舐めるように読んでいる。ときどき、取り合いになったときは仲裁に入ったりもする」(pp.7-8)とあるように、日中は、利用者が少なく、高齢の利用者が目立つことが述べられている。

3-2. 図書館の職員

この図書館の職員構成は、メインキャラクターである、契約職員の山本遥と「役場からこ

ここに移動になって二年ほど」になる「おそらく二十代後半であろう役場の男性職員、岡部さん」「児童室担当で、私が勤める前から在籍している三十代半ばの女性、当館唯一の司書資格保持者である香山さん」がおり、「みさと町立図書館・分館はこの三人で回している」(p.6)。「私がここに勤め始めた当初は、役場職員がもうひとりいて、人員に余裕があった」「が、その職員が退職して以降は、補充されないままなのである」。「私が雇われた翌年には館長が退職し、主査の岡部さんがやって来た。図書館長は本館に常駐している」(pp.28-29)という状況であった。遙は、「役場での人事異動の際、岡部さんはわずかな事務仕事を引き継いだけで、図書関係の作業は全く知らないままにここへ配置されたようだった」(p.115)と感じている。

契約職員の待遇については、「時給七百円」であることが、昼食の件で、香山さんとの違いについて、「役場職員である彼女はそれなりのお給料をもらっているから、毎日、外食も可能なんだろう。時給七百円の契約職員にはちょっと無理」(p.29)と描写されている部分に示されている。同じく図書館に勤務しているのだが、役場職員である岡部さんについて、遙の父親の知人女性は「『ちょっと頼りなさそうだけど、一応公務員のようなだね。将来堅いわ』」(p.119)と評価している。一方、遙については、同一人物が「『どちらにお勤め？ まあっ図書館なんて素敵じゃない。役場職員なのね。あら違うの。なあんだ』」(p.100)といている。役場職員（公務員）の待遇について、詳細な記述はないが、「時給七百円の契約職員」との間には、格差があることが示唆されている。

3-3. レファレンスサービス

先述のように利用者が少なく、高齢の利用者が目立っている状況で、レファレンス事例も件数・内容ともに、あまり多くはない。

a. 高齢者男性の本探しに対応する

「小刻みな摺り足で杖を突いたおじいちゃんがにこにこカウンターにやってき」て、遙は声を掛けられるが、話していることが理解できない。「『ええと、本を探されてるんですね？』」と尋ねるが、耳も遠いらしく「声を大きくしたら、閲覧室の奥の方から利用者『やかましい』と怒鳴られた。私はメモ用紙に『なんの本をお探しでしょうか』と書いて、紙と一緒にペンをおじいちゃんに差し出した」。しかし、紙に書かれた文字は、震えていて解読できない。そこへ、岡部さんが、事務室から出てきて、話をきき「あろうことか『ああ、はいはい。ありますよ』と理解し、カウンターの外へ出てきた」。本をお持ちしますと申し出たが断られ、「岡部さんはおじいちゃんを連れて NDC800 番台の書架へ向かった。おじいちゃんの歩速に合わせて、ゆっくり歩いて行く」(pp.166-167)。孫が結婚すると聞いて、結婚式のあいさつの本を探しに来たということであった。

この事例は、資料に関する専門的な知識が問われるというよりは、方言や高齢者に対応することへの慣れが、求められた情報や資料の提供のために必要となっているケースであった。

b. レファレンス事例の紹介

司書資格を持っている職員の香山さんが休みの日の状況について記述した部分で、「児童室には岡部さんが詰めた。香山さんと違って司書の勉強もしていなくて、私と違って一度もカウンター業務もしたことがない岡部さんにシステムの使い方を教え、本の貸し出し返却処理や、新規登録、予約や延長手続きはできるようになってもらったが、本の修理や、レファレンスまでは間に合わないため、私が引き受けた。児童書のレファレンスは、学校帰りの小中学生が、文字の起源について調べることとか、日本の伝統工芸について調べることなどであった。そういう課題が出ると、学校の図書館は目当ての本がすぐに借りられてしまうという。ありつけなかった児童生徒が図書館に助けを求めてやって来る。図書館は本のセーフティネットみたいなものだ。おとなからのレファレンスでは、昔読んだ、カエルが手紙を送る本とか、おばけがてんぷらになってウサギに食われそうになる絵本といった思い出の本探しや、ジャムの作り方の本といった簡単なものだったので助かった」(pp.191-192) とあるように、簡単なレファレンスの事例が、いくつか紹介されている。

c.子どもにオススメの本を紹介する

「そのお嫁さんは図書館に週一ぐらいの頻度でやって来ては、愚痴をこぼしていく。今年の夏に西日本から嫁いで来た方で——貸し出しカードを作るときにそういった話をお聞きした——、こっちの風習とか言葉とかになかなか馴染めないようだった」(p.271) という利用者が、「その後ろには、三、四歳ぐらいの男児——ワタルくんといったか——と、その手を引く六十代とおぼしき女性」「しゅうとめ、と林さんが口をうごかす」(p.323) とあるように、息子・しゅうとめ、と3人で来館し、『今日は子どもの本を借りようと思って。オススメはありますか』と尋ねられる。遥は、「ありがたくも面倒な依頼だ。かつて、同じようなことを言われて貸し出した本がまったく合わなかったらしく慚然として返されたことがある。そのときの私はまだまだ未熟で、今だって未熟なのだが、本当に自分のオススメを貸したバカ者であった」ということを思い出した。そして、「その利用者がいつも借りているジャンルで、だからと言っていつもと同じ著者ではなくテイストが似ていて新鮮味を味わえる本、どういう気分か慮って、どういう気分になりたいのか、という希望を汲み取って勧めねばならなかった。そういうことから、利用者にオススメを提示するのは、占い師かカウンセラーに近い仕事かもしれない。未だにそこまではできていない」(p.324) と感じている。結局、この日、しゅうとめは『ウサギとカメ』、嫁は、図鑑を勧めるが、「ワタルくんは勧められた本を気がなさそうに手にし、首を巡らせた。書架の一角へそろそろと歩み寄って一冊をじっと見つめる。おとなふたりはやれ、教訓が載った昔話がいいのだ、やれ、これからの時代は知識の本がいいのだと張り合っていた。さっき子どもに静かにするよう注意しておきながら今や、自分たちが声を荒らげるまでになっている。そんなおとなたちを尻目に、ワタルくんは、書架の前で前後に揺れながら本に釘づけだ」。遥は『これをオススメします』という、「ふたりが図鑑や絵本を手放すことなく近づいてきた。『みんなで作ろう ぼくとわたしの町のごはんとおやつ~みさと町の郷土料理~』かわいらしいイラストと、おいしそうな手巻きずしやクッキーが表紙を飾っている。「ページをめくっ

てワタルくんを確認すると、彼はおいしそうな料理に魅入られ喉を鳴らした。『借りてみる』ワタルくんは顔を上げて、うん、と頷き、白い歯を見せた」(pp.325-327)といった対応をしている。

「オススメ」の本について、単純に自分がいいと思った「自分のオススメ」ではなく、相手の状況を考慮して対処しないとうまくいかない、ということが、過去の失敗事例を紹介することで、語られている。

3-4. 図書館での問題行動

a. 利用者のマナーがよくない事例

水色の封書を突き出され「これを出しといとくれ」といわれたり、「図書館に出入りする宅配業者を見た町民の中には」「図書館に持ってきて『これも一緒に出しておけ』と押しつける人がいる。丁重にお断りするが、けちっ！とか、お役所仕事だねなどと暴言や嫌味を吐かれるのは辛い。「ちなみに電話を貸せと要求されることもしばしばだ。「お断りすると、棘のある言葉を吐いて携帯電話を取り出す」(pp.19-20)とあるように、図書館で法外な要求を職員に突きつける例が紹介されている。

b. 所在不明本

遙は、「パソコン上で在架」になっていて、書架にない「山菜の本」について、「岡部さん」に、「盗難という言葉は避け」て、紛失と思われることを告げる。岡部さんは、「『うちここは本に IC タグはつけてないし、出入り口に BDS も設置していない。ほかの図書館の話だと、窓から外に放って持ち出すって手段も確認されたらしいから、チップや BDS ばかりに頼るわけにはいかないしね。かと言って、一日中、来る利用者来る利用者を疑いの目で見て、後をつけるわけにもいかないよ。ここは年に十冊程度ですんでるけど、大きな図書館だと数百冊にもなるらしいから、うちはまだいいほう』現状解説と、相対的見解を示すだけで手を打とうとはしない。『ま、とりあえずは検索非公開設定にしといたら？』(pp.27-28)という。この本は、のちに「開館時間になり、正面玄関へ行くとすでに利用者が待っていて、紙袋を差し出し『うちの家にあったんです。こちらの図書館のバーコードが貼ってあったので』』とやってきた。「以前、システムでは在架になっているはずなのに、書架にはなかった不明本である。「貸し出し手続きをしまえば、期限内に返さないといけなから、こっそり持ち出していたのだろうか」(pp.53-54)ということで、亡くなった高齢女性の利用者が、正規の手続きをせずに、持ち出したものであった。

c. 傘などの盗難

靴がなくなると申し出たおじさんがいて、これは後に勘違いだと判明するが、「靴の盗難は初めてだが、傘は毎度毎度ある。透明なビニール傘はなくならないが、ちょっといい感じの傘は必ず盗られる。正月明けには、ロビーに飾っていた座布団大のお供えもちが持ち去られたこともあった」(p.96)が、当時の館長は警察沙汰にはしなかった。

3-5. トラブル事例

図書館の利用を通して、クレームが寄せられるケースは、近年、多くの図書館現場で、

発生していると思われるが、このストーリーでは、そうしたケースを多数扱っている。

a.返却トラブル

『返したって言ってるじゃないの!』カウンターで携帯電話を手にした、二十代後半ぐらいの女性が怒鳴った。しんとしている図書館内で女性の声は、心臓を貫くほど鋭く響く。何人かの勉強をしている学生の注目が集まった。「小学校五年生になった娘さんに頼まれた本を借りに来たのだが、娘さんの利用者カードを読み取ったところ、『未返却本があるため貸し出し不可』の表示が出た。そのとおりに告げたら、母親はすぐさま、携帯不可の館内、及びスタッフである私の目の前で娘さんに電話で確認を取り、振り向きざま怒鳴ったというわけだ」(p.104)という、借りた本を返却したかどうかについて、利用者の見解と図書館のコンピュータに表示される状況が異なっている事案が発生する。返却処理のミスも考えられるため、遥は慎重に対処するが、児童室にいた「香山さんが、『学校に返したんじゃないの?』といい、「町内の小学校へ電話して図書の先生に確認する」と『ありました!』という希望の声。私は母親を呼び止めて、学校の図書室の棚に差し込まれていたことを伝える」(pp.106-107)。子どもが、学校から借りたと勘違いし、叱られると思ってカウンターを通さず書架に戻ってしまったようで、「せめてカウンターを通していけば、その時点で図書館の本であることが分かったのだ。子どもに限らず、図書館でも、ときどきそういう利用者がいる。カウンターの返却処理を済ませず自ら直接書架へ戻してしまうと、PC上では延滞状態が続くことになる。次に気づかれるのは、別の利用者がその本を借りようとカウンターに持ってきたときか、本人がほかの本を借りようとしたときである。前者であれば、別の利用者にはすんなり貸し出せる。その場合は、延滞状態が、自動的に解除されるのだ。「問題は、書架に戻した本人がほかの本を借りようとしたときである。PC上ではそのひとは延滞中になっているので貸し出しできない。本人は返却したと主張する」が、「棚に戻したと教えてくれるならまだしも、どういう意図があるのか棚に戻したことを隠し、こちらの返却処理ミスにしようとするひともいる。実際、返却処理ミスの可能性もあるので、こちらも毅然と構えられない」(pp.107-108)。「本日は『誠に残念ながら』貸し出しができないことを再度告げると『学校にあったってことは失くしたってわけじゃないじゃない。だったらこれ貸してくれたっていいでしょ』と力業の理屈をおっ立てて持ち去ろうとした」。「『お客様それはいけません。それはできないですよ。前の本を図書館に返していただかないと』なんだってこんな当たり前のことを大のおとなに向かって説明しなければならないのか。情けなくて萎える」。返却ボックスなら時間外でも返却できることを伝えると、「彼女は眉根を強張らせたまま、ひと言も発せず、本をカウンターテーブルに投げつけると足音高く帰って行った」。遥は、「ぐったりと椅子に座り込んでカウンターテーブルに肘を突き、手のひらで鼻を挟むようにして頭を支えた。最近、こういうひと増えてきたなあ」(pp.108-109)と感じる。7)

b.著作権問題

図書館における資料の複写について、「ゼンリン住宅地図を全部コピーしろと強要する利

用者にできないことを説明したり——『おひとりさま一部までなので』『だったら従業員引き連れて毎日来てやる』『コンビニでもできますよ』『職務放棄か』『一部三百円です』『高いじゃないか、差額はお前が出すと言うのか』『すみませんが、図書館では請け負いかねます』(p.131) といったやりとりが、でてくる。

c.返却された本にダメージ

カウンターで「スパイシーな香りをまとい、ページが波打ち膨らんだ京菓子の本を返却され」「恐る恐る開いたところ、八ッ橋のページは全部真っ黄色。弁償のお願いをしたところ、『は？ なにそれあり得ない。お金取られるんじゃ、もう図書館なんか使わないから』と逆ギレされ」「神経を遣い倒すのはいつものこと」(p.131) で、この本は、「翌々日には、学校に返却された女兒の未返却本と、京和菓子がインドカレーに塗り替えられた本の弁償されたものが返却ボックスに入っていた。京和菓子のほうには、嫌みったらしく中古本屋のレシートまで挟まれてあった。愉快ではないが、一応はほっとし、返却処理をして、弁償された本の新規蔵書登録をした」(p.151) とあるように、返却ボックスに投入されていた本を処理している。

d.退職した男性利用者同士の怒鳴り合い

「閲覧室の奥から」「『やかましいってへってらべな！』という怒鳴り声と『おめえのほうがるせえんだよ！』というもうひとつの反論がひびいた。「新聞コーナーのおばさんがバサバサと乱暴に新聞を閉じて、新聞バサミでまとめられたそれをラックに叩きつけるように置き、スリッパの音高らかに出入り口へ向かう。『ありがとうございます』と声をかけたらじろりと睨まれた。「書架の前では、おじさんふたりの怒鳴り合いが始まってしまっていた。私は慌てて児童室に内線し、『一般室のカウンターをお願いします』と頼むと、争いを止めるべく奥へ駆けた。「どちらも腹が出て頭が薄くなったいい年の男性である。定年退職したてに見える『まだまだやれるぜ血気盛ん』な雰囲気のおじさんたちだ」「まだまだやれるぜ、なのにやることなく日がな一日図書館にいなければならない。コンビニの弁当持参で、会社の代わりに今度は図書館に通勤しているといった感じだ。その虚無感たるやいかばかりか。そういうおじさんたちが図書館という場所を弁えることなく怒鳴り合っているのだ」(pp.168-169) とあるように、利用者同士のトラブルが発生する。

「ひとりが硬い本を抜き取ると相手のおじさんに向かって振り上げた。止めようと割って入った私はよろめき書架に背を打ち付け、思わず座りこむ。本が降ってきた。頭を覆う腕を重たい本が減多打ちにする」と、他の利用者のおじさんが、岡部さんを支えにして「杖で書架をガンガン殴る。おじさんたちは呆気にとられて相手の襟首をつかんだまま固まった。「おじさんたちはくすぶりながら相手をひと睨みすると、引き上げていった」(pp.169-170)。本が落ちてきて、遙は負傷し、湿布薬をあてながら、岡部さんと『『図書館で負傷するってどうなんですかね』『昔は穏やかな方が多かったって聞いてるけど、今は結構おじさんたちも荒くれてきたよね。図書館でバトルなんて考えられなかったもの』『怒鳴られたりキレられたり、拳句の果てに負傷。あまりに悲しくて情けなくて、もう、

やる気なくなりますよ』『やる気なんて求めてないよ。やることやってりゃやる気なんて必要ないって』岡部さんは当然のように言い放つ『岡部さんに言われてもなあ。毎日毎日ネット見てるだけなんだもん』『ひっどーい。ぼくだってときどきは仕事してるじゃん』まあそうかもしれない。上に立つひとはこれぐらいの緩さでいい。あんまり働かされたんじゃ、こっちも息が詰まる」(pp.177-178) という会話を交わす。

e.電話で延長依頼を断る

「電話が鳴り、『いつもご利用ありがとうございます』と図書館名と自分の名前を告げる。本の延長依頼だった。次のリクエストが入っていたので、延長はできかねますと答えると、相手は烈火のごとく怒った。怒られても駄々をこねられても、次のひとが待っているので返してもらわねばならない。その旨を伝えて『よろしくお願い致します』と言い終わらないうちに電話は切られた。「ひょっとして延滞しているひとがまだいるかもしれない、と、システムに検索をかける。ずらりと一覧が出てくる。延長の常連さんばかりだ。督促電話をかけるべく、受話器を持ち上げた」(pp.203-204) とあるように、期日になっても返却しない利用者が相当程度存在することが示されている。

3-5. 図書館に特有な事案

次章で扱う『図書館は、いつも静かに騒がしい』では、専門性の高い業務とされている「相互貸借」については、図書館の日常の描写の中で、「雑誌配達の書店員さんが来て、宅配屋さんが他館から借りた本を届けてくれて、雑誌を登録したり、他館へ貸し出すための手続きや梱包をしたり、問い合わせの本を探したりしているうちに、気がつくと休憩終わりの二時を回っていた」(p.137)。「午後になると、近隣町から寄せられた相互貸借の依頼を受理して手続きをしたり、町内の各施設に貸し出す本屋、読み聞かせの絵本を選んだりして過ごした。町内広報の原稿を作っている途中でふと顔を上げたのは、寒さを感じたから」(p.241) などと、に紹介されている。

注

1)高森美由紀『みさと町立図書館分館』産業編集センター、2017.10

各章の表示に、図書館で使用されることの多い、「3段ラベル」が使用されている。

2)高森美由紀『花木荘のひとびと』集英社(集英社オレンジ文庫)、2017

「ノベル大賞 2017 年受賞作発表」

(<http://www.orangebunko.shueisha.co.jp/novel-award/winners/2017year>)

3)メインキャラクター山本遥の両親の新婚旅行先が「松島」(P.78) とあるのが、数少ない、地名の例である。また、ラジオの番組について、書かれている部分で「パーソナリティは津軽弁のニュアンスで語っていた」(p.64) との記述がある。

4) (<http://www.lib-finder2.net/sannohe/>)

5)「暮らしの小説大賞」受賞コメントでは、「ほとんど町内からでたことがなく、生活圏域は半径2キロほど」と述べられている。

(<http://www.shc.co.jp/book/kurashi/winner/index.html>)

『小説新潮』2017年12月号の書評では、小説の舞台について、「山に囲まれ田園風景が広がる過疎の町」としている。

「[本の森・仕事・人生] 『踊る星座』 青山七恵/『みさと町立図書館分館』 高森美由紀
レビュアー吉田大助 (ライター) 『小説新潮』 2017.12

(<http://www.bookbang.jp/review/article/542328>)

6) 「母が死んで、父は料理を始めた——とある雪国で日々巻き起こる、様々な家族のカタチ」
『ダ・ヴィンチニュース』

(<http://ddnavi.com/review/406032/a/>)

7) この図書館では、返却が遅れている本が1冊でも存在する場合は、貸出できないという設定だが、現実には、柔軟に対応している例もある。

たとえば「大阪市立図書館」のホームページで、トップページ右上にある「よくある質問 FAQ」では、「返却が遅れた場合、借りられなくなりますか？」に対して、「やむを得ない事情を除き、長期（15日以上）延滞している資料をお持ちの場合には、その資料をお返しいただくまで、新たな貸し出しはできません」と回答されており、長期延滞でなければ、新たな貸し出しも可能、となっている。

(<http://www.oml.city.osaka.lg.jp/>)

4. 端島凜『図書館は、いつも静かに騒がしい』1)

4-0. 端島凜

この本の著者である、城島凜については、『図書館は、いつも静かに騒がしい』カバーの折込部分に「群馬県出身。図書館員として働いていたが、体調不良により退職。病気療養中に小説投稿サイト「エブリスタ」の存在を知り執筆を開始。2016年11月『調香師 成瀬馨瑠の芳醇な日常』でデビュー」と記されている。

4-1. 図書館の設定

この本のメインキャラクターは「就職活動で挫折し、半年間ひきこもっていた23歳の菅原麻衣。偶然見つけた区立詩島図書館の求人に応募したところ、あっさりと採用される」2)と記述されている。

菅原麻衣が初めて勤務する日に行った図書館の施設については、「三階建て鉄筋コンクリート」で「入口正面には、『東京都城北区立詩島図書館』と書かれた金属プレート」があり「無骨で飾り気のない無味乾燥な外観は、まさに公共施設の見本」。「自動ドアの横に貼られたカエルのイラストすら、お役所的な感情の読めない笑顔を浮かべている」(p.8)という。この「詩島図書館は一階が視聴覚資料や旅行書、それに文庫や大活字本を含む文芸書が配置されている。大活字本というのは普通よりも文字が大きい本らしい。小さい文字だと読みづらい人のための本」「二階は雑誌や実用書や地域資料、中高生向けの本や児童文学が用意されている。中でも目を引くのは、絵本のコーナーだ。厚めの絨毯が敷かれ、クッションやぬいぐるみが置かれている。靴を脱いで上がる、赤ちゃんやお母さんのための

スペース」(p.34)であり、「三階が書庫と事務所、それに更衣室や休憩室」(p.28)となっている。「返却された館の所蔵となる『所在館方式』を採用しているため」蔵書数は常に流動的だが、「視聴覚資料も含めて約八万五千点くらい」(p.28)である。

図書館の開館時間については、「開館は月曜日から土曜日が九時から二十時、日曜祝祭日は十七時まで」「毎月第三水曜日は館内整理日のため休館」「特別整理期間があり、毎年秋に十日ほど休館して蔵書の点検を行う」。麻衣は、「休館日は図書館のスタッフも休みだと思っていたので、そのような業務をしていたとは驚き」(p.28)だった。「詩島図書館は、毎月第三水曜日が館内整理のために休館となる。そして、今日はその館内整理日に当たり、朝からスタッフ総出で普段はできない作業に勤しんでいた。大掃除やリサイクル本の整理、雑誌の除籍に棚のレイアウト変更。休館日でないといけない作業は思いの外多い。しかも、そのほとんどが力仕事だ。自分のペースで仕事を進められるとはいえ、慌ただしく動き回るせいでお昼を迎える頃にはくたくたに疲れてしまう。それは全スタッフが同じらしく、お昼休憩の後は体力回復も兼ねたミーティングを行うことが恒例となっていた」(p.178)。

また、「ブックポストは、閉館後や休館日に資料を返却するための設備だ。詩島図書館では入口正面の左側壁面に投入口がある。そこに資料を入れると、バックヤードに設置された箱へ溜まっていく仕組み」(p.29)である。

図書館の時間帯による利用状況については、「図書館は、常に静謐とは限らない。子ども連れの多い午前中、放課後の学生が集まる夕方、ビジネスマンが帰路に就く夜間。夫々の時間帯において、いつも微妙に騒がしいのである」(p.104)とあり、開館時間中を通して、一定数の利用者が訪れていることが紹介されている。

4-2. 図書館職員

冒頭の「人物紹介」(pp.4-5)では、図書館関係の登場人物について、それぞれ「菅原麻衣 就職活動に失敗後、詩島図書館に就職する。基本的にネガティブで羊毛フェルトが得意。23歳。」「吉見彩 図書館マネージャー。真面目で責任感が強い。40歳。」「五十嵐菜穂 元保母さんで、おはなし会が得意。35歳。」「有村小夜子 レファレンスが得意。本は大好きだが人間には興味がない。24歳。」「館長 図書館長。いつものん気にお茶を飲んで吉見に叱られえている。」「三峰塔子 サブマネージャー。麻衣の教育係を担当している。30歳。」「鮎川智也 軽薄でミステリーが好き。23歳。」「岸本要 爽やかで力仕事を率先してやってくれる。22歳。」と、イラストつきで紹介されている。

『図書館で働いている』というと、公務員と思われがちだが、実際は違う。年度毎に契約書を交わす非正規雇用なのだ。詩島図書館の場合は、館長だけが区の職員で、他のスタッフは業務委託を受けた会社に所属している。近頃ニュースで話題にもなっているが、非正規の図書館員の給料では貯蓄もできないのが現状だ」(p.159)というように、館長のみが区の職員で、他は委託会社のスタッフ、という設定になっている(待遇面は後述)。

図書館の仕事に対して、麻衣は「自分の持っている『図書館の仕事』というイメージが実際の現場とは乖離していることに気づいた。麻衣の中で図書館の仕事というのは、静謐

な空気の中、静かに微笑んでカウンターに座っている——というどことなく優雅で上品で楽な仕事という印象だった。もしかすると、案外大変な仕事なのかも知れない」(pp.28-29)と感じている。

4-3. レファレンスサービス

この図書館は、具体的な地名は架空のものだが、「東京都城北區立詩島図書館」(p.8)という名称で、東京都 23 区の区内に複数館存在する館のひとつ、という設定になっている。そこでは、さまざまな利用者が来館し、職員に質問をしている。その質問事例と回答するまでのプロセスや、担当する職員の意識が、具体的に描写されている。

a. キーボードの並び

「齢八十をこえて鬢鑠」としている「高梨のおじいちゃん」は「ちょっとした疑問や謎が思い浮かぶ度に、カウンターにやって来ては少年のような目で答えを求める」。「それを一緒に探すお手伝いをする、いわゆる『レファレンス』業務も図書館員の務めではあるのだけれど、日に何度も質問を変えてやってくると、それだけで業務が滞ってしまう。質問がひとつ解決すると、それについてもっと詳しく知りたい人のようで、職員の間でも一筋縄ではいかないと評判の存在」(pp.72-73)である。パソコンのキーボードの並びがどうしてあの配列になったのか、という質問を受けた麻衣は、「カウンターに置かれたパソコンで蔵書データを確認し始め」るが、行き詰ってしまう。「『いつもの人なら、何聞いてもすぐ見つかるんだけどのう』」といった後、麻衣のネームタグに貼られた「研修中」の札に気付く、それなら、気長に待つとしよう、という。パソコンの資料の書架に行ってみるが見つからなくて、途方に暮れ、麻衣は、配架の途中であった職員の小夜子に相談する。パソコン関係の書架とは違う、工業について書かれた本が並ぶ書架から『キーボード配列の謎百科』を手に、この本に書いてあると思う、と小夜子は差し出す。高梨のおじいちゃんに手渡すと、見つかったか、研修中なのに優秀じゃのう、と言われる。排列はタイプライターから継承されているものだった (pp.73-76)。「蔵書データを調べ、書架の確認もしたのに見付けられなかった自分に対し、小夜子は少し事情を説明しただけで、あっという間に答えにたどり着いた。歴然とした能力の差。途方もない劣等感が麻衣を襲い、己の無知を再確認する」(p.77)。小夜子は、気にしないで、と対応するが、麻衣が働き始めて一ヶ月くらいだと言うと「『それなら、少しは気にした方がいいかもね』」(p.78)と答えている。

どのような条件で検索したか聞かれた麻衣は、「パソコン」や「キーボード」で検索すると大量にヒットしてしまったことを伝える。小夜子は、検索方法は「間違っていないのだけれど、ちょっとツメが甘い」といい、書名より「一般件名」で探した方が見つけやすい、一般件名とは「その本に書かれている内容を示している」「ハッシュタグのようなもの」と説明するが、「実際は書架を確認した方が手っ取り早いことも多い」ともいう。すべての棚の本を覚えているわけではないが、「『私は今、あそこの書架を担当しているの。それで面白いタイトルだなんて記憶に残ってただけ。書架整理をしている時に、本のタイトルを眺めるのは私の趣味なの』」(pp.79-81)と、小夜子はいう。書架整理は「文字通り書架の整

理をする作業」で「配架の間違いや、利用者が書架へ戻した資料を、適切な場所へ戻すために行われる。各々に担当書架が割り振られ、空いた時間を使って誤配がないかを確認するのが詩島図書館の習わし」(pp.81-82)になっている。

b. レファレンスに関する三峰塔子のコメント

これは、実際に利用者から受けた質問ではなく、「サブマネージャー」で「麻衣の教育係を担当」(p5)している「三峰塔子」がレファレンス質問について麻衣に解説するシーンである。「お茶の本を探してる」と聞かれたらどうしますか、と問われた麻衣は、「料理・暮らし系の棚にあるお茶の楽しみ方の本を紹介」すると思う、と答える。普通ならその可能性が高いが、「もしも、その人の求めている資料が全然別物だとしたら?」「『お茶』と一括りにいっても、種類は様々」「お茶の淹れ方の本、お茶の種類の本」「お茶の歴史の本」「お茶の木の栽培方法の本」「茶道」「それぞれ分類も違い」「色々な可能性を考える必要がある。「そういうときは、こちらの聞きたい情報を引き出す必要がある」。「レファレンスをする際は、相手に取材をするつもりで話を聞くのがコツです」。「本質の見極め」「欲しい情報の内容は勿論、タイトル、大きさ、色、重さ、デザイン、発売時期、出版社、……とにかくもらえるだけの情報をすべて聞き出すのが、正解へ辿り着くための近道です」。「手掛かりは多ければ多いほどいいのですが、相手の記憶が曖昧な場合もあって、聞いた情報がすべて真実とは限りません。情報を紹介して、探して、いちばん可能性が高そうなものを提供して確認してもらう」「これって、何だか面白いと思いませんか」(pp.91-92)というように、塔子は、麻衣に向かって「レファレンスインタビュー」の必要性や利用者の求めている情報の中身を正確に把握することの重要性を説明している。

また、塔子は、レファレンスにおいて「絶対ってはいけない言葉」は「わかりません」という言葉で、図書館の人に「分からない」といわれたら、もうそれ以上探しようがない。私たちが「分からない」と答えてしまったら、その人の知る権利はそこで止まってしまうのだから無責任に「分からない」とってはいけない、それはすべての資料の中に、あなたの求めている情報はありません——という意味と同義になってしまう(pp.93-94)と述べている。麻衣は、「今まで何の感慨も持たずに利用していた図書館という施設。そこで働く人々がそのような志を持ち、しかもそれを当たり前のように受け止めていると知り感動してしまった」。「利用する立場の人間は、その気持ちを知ることはない。けれど、彼らは見返りを求めることなく業務に励んでいるのだ。その姿にいじらしさすら感じてしまう」。さらに、塔子は「『私たちは貸本屋ではありません知識を収集し、蓄積し、提供することこそが使命です』(p.94)と発言している。そのレファレンスサービスに関するコメントの内容は、妥当なものだが、司書資格がなく、図書館に勤め始めて間もない麻衣に対する指示としては、ハードルが高すぎるのではないかとも思える。

c. 羊水の温度

麻衣が書架整理をしていると、書架の本を出して戻してをくりかえしている利用者がいたので、「『何かお探しですか』と話しかけると「男性は驚いてピクリと背中をのけぞらせ

た。年齢は五十代半ばくらい」で、手元にある本は、育児書のような本だった。赤ちゃんが浸かっている液体である「羊水の温度が知りたい」という利用者に、麻衣は、何故そんなことが知りたいのか疑問を持つ。「やっぱり相談するんじゃないかな、という心の声を貼りつけたまま、男性は書架に視線を移す。その反応を見て、麻衣は自分が怪訝な顔をしてしまったことに気付いた」(pp.95-96)。

麻衣は、「色々な可能性を考えて、先入観を持つてはいけない」「もらえるだけの情報をすべて聞き出す」「取材をするつもりで話を聞く」という、塔子のアドバイスを思い出し、「ヒントになりそうなことは些細なことでも確認し」た。ある可能性を感じて、医学・健康の資料が並んだ書架へ行って、本を手に取り、目次を確認しページを開くと、「羊水の温度」に関する記述が載っていた。「『君に声をかけてもらえて助かったよ』。『気持ち悪がられるだろうと思って、なかなか聞けなくて』『自分だけじゃ絶対に見付けられなかったと思うよ。やっぱりプロに頼んでみるもんだね』」といわれ、麻衣は、「プロと呼ばれると、恥ずかしくてこそばゆい。でも、嬉しい」と感じた (pp.97-98)。

この男性は、銭湯を経営しており、変わり湯のバリエーションがマンネリ化している中で、趣向の変わったテーマを考えていた。テレビで「究極のリラックスに迫る」という番組で、お母さんのおなかの中が、もっともリラックスできる環境だ、と解説されていたのを見て「羊水の温度が知りたくなった」。それならば、育児書ではなく、健康やリラックスについての書籍に記述があるのではないかと麻衣は考えた。「『来月の変わり湯でやってみようかな?』」と、この男性は本を借りていく (pp.97-99)。

レファレンス質問に対する回答が、仕事に必要な情報につながっており、「ビジネス支援サービス」の一例ともいえる。のちに、麻衣はルームシェアをしている夏海とともに、「レファレンスを担当した男性が経営する」銭湯へでかける。「『あっ！ 図書館の人！ 来てくれたんだ』」といわれ「リラックスの湯」は、想像以上に評判がいいと聞かされる (pp.155-156)。

d.利用者におススメの本を紹介する

これも、実際の利用者の質問ではなく、サブマネージャーである三峰塔子の中学生時代のエピソードである。塔子は、「『私は昔、図書館に救われたことがあるんです』」という。中学生の頃、昔から無口で人とコミュニケーションを取るのが苦手で、クラスで浮いていた。父が再婚して弟が生まれたばかりで、心配を掛けたくなかったこともあり、「『居場所にしたのが図書館だった』」(pp.113-114)。開館から閉館までずっと図書館にいて、本を読むふりをし、学校も無断欠席していた。「『あのさ、この本読んでみてよ』」と声をかけられ「図書館の女性スタッフが一冊の本を差し出して立っていた」。「『あなたいつも本を見ているけど、全然読んでないじゃない。同じ時間ここにいるなら、興味のない本広げて暇を潰すより、面白い本を読んだ方がよっぽど有意義だわ！そしてこれが、私のすっごいオススメの面白い本！ だから読んでよ』」。「『あなたがどんな事情でここにいるかは知らないけれど、私はそれを聞かないし、学校に告げ口もしない。図書館は、無条件であなたを受

け入れるし、プライバシーも守る。いつだっけていてくれていいの……でもね』『つまらな
そうな顔で本を眺めてるのは許せないの！ 個人的に！』『ひとりの読書好きとして、あ
なたに本を好きになって欲しいの。本の世界へ没入する楽しさを知って欲しいのよ』
(pp.115-117) といわれる。

塔子は、『……今考えると、本当にむちゃくちゃな理屈です』。『……でもね。心底救
われました』といい、その本は、とても面白かった、それが、本好きになったきっかけで、
それで司書になろうと思った。『図書館が誰かにとっての安心できる場所になるなら、そ
れはとても意味のあることだと思ったんです』。「麻衣は口の中で塔子の言葉を反芻した。
……図書館は、本を借りるためだけの場所ではない」(pp.117-118)。

図書館員が面白いと思った本を読むようにすすめられ、その本が、とても面白く、すす
められたがわにとっても魅力的と感じられた事例である。

e.大衆演劇の役者に芝居の参考になりそうな本を紹介する

e-1.櫻井辰之進

小学生の弟と図書館にやって来た、大衆演劇役者の櫻井辰之進が『せっかくだから、俺
も何か借りていこうかな？ 芝居のアイディアになりそうなやつ。よければ探すの手伝っ
てくれると嬉しいんだけど』と麻衣に、相談する。どんな資料、と尋ねると、この辺の逸
話や伝説に関する本、郷土の民話なんかを、というので、地域資料のある二階へ案内する。
「このあたりの書架は現在、麻衣が整理を担当している」ので、役立ちそうな資料をピッ
クアップし、城北区の逸話や怪談についてまとめられたものを紹介した (pp.125-126)。仕
事に役立つ情報を提供したということで、これも、ビジネス支援サービスの一環と考えら
れる。

e-2.櫻井雅

辰之進の妹、櫻井雅に、銭湯で、偶然会った際、自分は大衆演劇に向いてないんじゃない
か、観客は顔の整った男が演じる妖艶な女形を見たいんだ (p.163)、という「雅の悩み
を聞いた時、麻衣は選書カタログに載っていた本を思い出した。それはコスプレ衣装の型
紙をまとめた本で、中でも男装に特化した一冊」で、麻衣は、雅に男装を提案し、それを
実際の舞台に生かすと、大成功だった (pp.171-172)。

f.子どもの頃に読んでもらった絵本を探している女性に、その本を探し出して提供する

「毎日絵本コーナーに佇み、難しい顔をして背表紙を確認している女性がいる」。「指と
視線で絵本をなぞりながら、気になる絵本があると引き抜いて読む。けれど、お目当ての
作品は見付からないらしく、深いため息と共に絵本を書架への戻していた」。「あの……何
かお探しでしたら、お手伝いしましょうか？」背後から遠慮がちに尋ねる」(p.209)。麻衣
は、一緒にお探ししましょうかと提案するが、タイトルすらわからない、小さい頃両親に
読んでもらった絵本を探しているが、ふたりとももういないので、聞くこともできない。
自分が親になり、幼い頃に両親に読んで貰った絵本を思い出し、曖昧な記憶を頼りに、書
店を何軒も回ったが見当たらなかった。「夫から近くにある詩島図書館の存在を聞いて、古

い絵本でも置いてあるかも——と考え来館してみた」(pp.210-211) ということだった。

この女性は「嶋田優里香」といい、結婚を機に城北区に転居し、現在は産休中。麻衣が、どんな絵本だったか聞いてみると「淡い色使いの表紙。我が子に語り掛けるような内容で、おへそと虹が出てきて、自分の名前『優里香』が繰り返される絵本」だったが、名前を呼ぶ箇所は両親のアレンジかも知れない、という (p.212)。

翌日、職員で「元保母さん」(p.4) の菜穂に、絵本について尋ねると、少なくとも二十年前には刊行されてる作品で、長年、読みつかれている名作ならタイトルくらい思い浮かびそうだけど、あまり有名な作品じゃないのかもしれない、と少し考えてから、『『小夜ちゃんに相談してみたら？ あの子のレファ能力半端ないからね』』(pp.213-214) と、提案する。「小夜子にも確認したが、データベースや関係資料を探しても結局何も分からなかった。ピンポイントで資料を検索するには、あまりにも情報が少なすぎるとのことだ」(p.224)。

その後、職員の会話の中で、相互貸借の話題から、国立国会図書館の話になり、探している絵本について、小夜子は、『『上野の「国際子ども図書館」になら所蔵されているかもしれないわ』』『『国会図書館の支部図書館で、児童書を専門に収集しているの』』(p.243) と説明する。日本国内で流通している絵本を探すなら、可能性はここが一番高いので、行ってみる価値はある、と麻衣は考え、可能性のありそうな絵本を端から探していけば、見つかるのではないかと思うが、日本語の図書だけでも二十八万冊以上あり、数は増える一方で、ほとんど閉架で、書庫に入っているという。

麻衣は、来館した優里香に、あらためて、もう一度最初からきかせてほしい、と提案し、表紙は白っぽかった、中身は淡い水彩画のイラスト、虹の円に囲まれた、赤ちゃんの絵が印象に残ってる、などということを引き出す。そして、「ゆりか ゆりか かわいいこ」(pp.247-249) というフレーズがあることが思い出された。しかし、業務端末で絵本のフレーズを検索しても、出てこない。麻衣が、バックヤードで雑誌の修理の作業中、カウンターでの利用者と他の職員との会話で、「耳で聞いた音を文字に直すと、聞き手によってけっこう違」うと、話していたことから、手元の雑誌タイトル「詩や批評を中心とした芸術総合誌。その雑誌名に、雷に打たれたような衝撃が走る」。「急いでパソコンを立ち上げると、データベースの検索窓へ文字を打ち込んだ」。「見付けた！ そこには、一冊の絵本が表示されていた」(pp.255-256)。のちに、これは、『ユリイカ』という雑誌で、『『ゆりか』じゃなくて、『ユリイカ』だった』(p.271) というストーリーにつながることになる。

麻衣は、ルームシェアをしている夏海と、休日を利用して、上野を訪れ、国際子ども図書館を訪問する。「目的はもちろん、あの絵本を確認しに国際子ども図書館へ向かうためだ」(p.256)。ここが図書館？ イメージと違う、昔は帝国図書館とかいう施設だったらしく、この建物は子ども図書館というイメージからは、かけ離れた見た目だ、と麻衣は感じた。

閉架資料を閲覧したいという「『国立国会図書館の登録利用者カードはお持ちですか？』』と聞かれ、ないことを伝えると『『では当日利用カードを発行しますので、お手数ですが利用申込書にご記入をお願いします』』(p.260) といわれる。

館内の利用方法について、職員から説明をうけ、閲覧したい資料がある場合、端末を使って資料の請求をするように言われる。「職員が示す先には何台もパソコンが並んでいる。おそらくオンラインの蔵書目録だろう。慣れない手付きで端末を動かし、探していた資料を表示させる。当日利用カードを使用して、閲覧の手続きをして窓口へと向かう」待つ時間は長く感じたが、掲示板に呼び出し番号が表示され、「ついに麻衣は資料と対面し」間違いない、これだ、と感じた (p.261)。

翌日、図書館に出勤した麻衣は、小夜子に話しかけ、相互貸借をお願いしたい資料がある、と、昨日国際子ども図書館へ行って実物を見てきたことを伝える。小夜子には、「『あんたもなかなかやるじゃん！っていったの！あんな曖昧なレファレンスの回答を探し出したんでしょ？』」といわれ、「『それらしき資料が見つかったことを報告したら、「是非予約をしたい」とのことでした。それで、リクエストカードに記入してもらってあります』」と麻衣は伝えた。「相互貸借の資料は、データすら存在しないものも多い。そのため、希望資料の詳細をリクエストカードに記入してもらう必要があるのだ」(pp.267-268)。二週間ほど過ぎたある日の午後麻衣は、来館した優里香に、一般流通していた書籍じゃなくて、自費出版されたものみたいなんですよ、と「透明のビニールカバーに覆われた表紙を見せると、優里香の表情がパッと明るくなった」「『ゆりか』じゃなくて、『ユリイカ』だった」(pp.270-271)。

麻衣が、個人的に出版した絵本を国立国会図書館へ納本したものと思われることを説明すると、「『この絵本の作者は……私の両親なの』『両親の出会いは文芸サークルだった』」と優里香が背景を説明する。麻衣は、「こちらの資料は、館外貸出はできませんが、こうして取り寄せてお読みいただくことはできるですよ。何度でも。だから——また、いつでも依頼してくださいね」。「優里香の姿を眺めていたら、麻衣の口は無意識に動き出して言葉を紡いでいた。詩島図書館の人間として、優里香にそれを知っていて欲しかったのだ」(pp.272-273)。

4-4. トラブル事例

a.利用者から本の破損を申し出てきたケースの対応

麻衣がカウンターに入ると、老夫婦が返却に訪れ、本のページが少し破けていた、と申し出る。「こういった場合の対応は、図書館で働く者として非常に気を使う。公共図書館は基本的に無料でサービスを提供しているが、資料に汚破損があった場合は弁償してもらう必要があるからだ」。「同一あるいは代替え資料の購入をお願いするというのは、利用者に金銭的な負担が発生する。いくら利用者に不手際があったとしても、お金の話となれば慎重に進めなければならないのだ」。「貸出資料はたくさんの人の手に触れるので、経年劣化や不可抗力の汚破損もある。弁償対象か否かは、区の指針と合わせて、ケースバイケースで現場判断していた」(p.88)。麻衣は、過去の事情と照らし合わせ読む分に問題なしなので、弁償する必要はないと伝える。また、セロハンテープで貼ろう思った、との申し出には、セロハンテープは、時間が経つと劣化して資料が傷んでしまう、修理には専用のテープを

使う、と伝える。

b. 子供が騒いでいるのを注意する

「騒がしい利用者に注意を促すのも、図書館員としての立派な業務の一つだ。けれど、あまりに無言を強いるのは、個人的には気が引けた」(p.104)と麻衣は思っているが、小学校低学年くらいの子供が騒いでいると、「損な役回りではあるけれど、静かに読書を楽しむ他の利用者のためにも大人しくしてもらわなければ……意を決して小さく呼吸を整えた」(p.105)ときに、いっしょに来館していた十代半ばくらいの少女が、弟たちに注意する。

c. 少女をみかけで判断して、学生と思い込んで対応し気分を害させる

上の場面の続きで、子どもが貸出を希望し、カードを作ることになる。子どもたちといっしょに来館していた、少女(櫻井雅)に対して、麻衣は、『「学生証をお預かりします」』と「マニュアルに沿って証明書の提示を求めた」。申込用紙を確認すると、「在勤」にチェックがついていたが、「若い顔立ちだし記入されている年齢も十六歳」で「先入観から学生であると思い込んでしまった」(pp.109-110)。成り行きを見守っていた、サブマネージャーの塔子が、子どもに話しかけることで、怒りをそらし、毒気を抜かれた、雅も、ちょっと言いすぎた、とつぶやく。

d. 他の利用者が返却した本を聞き出して、同じ本を借りようとする利用者への対応

大衆演劇のスター辰之進の女性ファンの行動がトラブルを引き起こす。レファレンス事例でふれた、櫻井辰之進が、資料の返却に図書館を訪れる。麻衣がカウンターにいた時間で、「そのまま受け取って」「返却を掛け」「返却待ちのコンテナ箱に」入れる(p.140)。この本面白かった、悲恋を絡めた怪談で、これを軸に脚本書いたら面白いかも、参考になった、と辰之進が、二階の郷土資料の書架へ向かった後、「カウンターで資料の整理をしていた麻衣に不遜な声が掛かる」。演芸場で見た若い女性ファンが、『「さっき、若様が返した本を借りたいんだけど?」異常なまでの高圧的な態度で、女は麻衣に詰め寄る。それに気圧されながらも、麻衣はおずおずと要求を断った。『申し訳ありません。貸出履歴はプライバシーに関わりますので、お教えすることはできないんです』図書館の職員である以上、利用者の秘密は守らなければならない。個人情報やプライバシーに関する情報の取り扱いについては、折に触れて耳が痛くなるほどいわれているのだ。』『「何で? 別にいいでしょ? どうせ本棚に戻る本なんだから、どのタイミングで借りたって一緒じゃない!』。『すみません。お教えできないんです』(p.141)というやりとりがある。この時は、麻衣が図書館員としての立場を利用して、辰之進近づこうとしていると思い込んでいる演劇ファンに対して、図書館にきていた妹の雅が反論し、演劇ファンの女性は、そのまま館を出ていく。翌日、お騒がせしてすみませんでした、と事情を聞いた辰之進が謝罪に図書館を訪れる。

利用者のプライバシーに関しては、麻衣が最初に出勤した日の館内研修で、貸出履歴について、説明している部分でも扱われている。ブックポストに返却された本に挟まっているものについて、確認する必要があることをマネージャーの彩から聞かされた際、『「返却

すると貸出履歴は消えてしまうから、返却処理する前に確認をしておかないと』といわれ、返却をかけると履歴は消えることを教えられる。麻衣は、「なんとなく借りた本のデータはいつまでも残るものだと思っていた。自分の借りた本が履歴として見返せれば、達成感もあるし、もう一度読みたい時にも便利なのに」（pp.30-31）。小学校の図書室では、本の後ろに挟まってるカードに名前を書いて借りていたことを思い出す。彩は『確かに昔の図書館はそうだった』。『自分の借りようとする本のブックカードに、いつも同じ名前があるのが気になって……みたいなアニメ映画もあった』。3) 『個人情報に厳格な今のご時世じゃ、絶対に考えられないストーリー』（p.31）と話す。「あの映画においてブックカードは重要なファクター」だったが、『貸出履歴って実際は結構センシティブな情報』『図書館にある本って小説だけじゃない』し、『取り扱うジャンルは多岐に渡る』。『大袈裟でなく、借りる本からその人の思想や信念が分かってしまう』から『口頭で本のタイトルを伝えるのも注意しないとイケない』（p.32）と、彩は麻衣に注意を促している。

マネージャーの彩は、これから図書館で働こうとする麻衣に対して、『私たちは、利用者の秘密を守るための黒衣でなければならない』と注意する。麻衣は、「図書館は小説以外の本も扱っていることはぼんやりと理解していたが、借りる側の気持ちにまでは考えが及ばなかった。確かに、借りた本のタイトルによっては、その人間の本质が露わになってしまうだろう。知られたくないと考えるのも道理だ。自分の思慮の浅さに思い至ると同時に黒衣という言葉がやけに重たく感じた」（p.32）。

e. 図書館員へのプレゼントへのクレーム

辰之進は、はじめて図書館を訪れて、麻衣と会話をした際に、『紙は手の脂を吸うし、表紙はほこりで汚れてるし、紙で指を切ることだってあるし、本の消毒でアルコールも使う。』『手荒れは図書館員の宿命だし、仕事を頑張ってる勲章みたいなものなんです！ 何も知らない人に、勝手に決めつけられたくないです！』（pp.127-129）といわれたことがあった。

大衆演劇の女性ファンの行為を謝罪するため、辰之進が、図書館を訪れた際に、プレゼントを持参する。高級ブランドのハンドクリームを、貰えませんかよ、という麻衣に対して、『個人的なプレゼントだと思わずに、図書館の人みんなで使ってよ』と置いて行く。「対応に困った麻衣は、事務所に戻り彩に報告して判断を仰いだ」が、マネージャーの彩も、本当なら、こういうプレゼントを受け取るのは御法度なんだけど、と困惑する。辰之進は、いらないのであれば捨てて、といており、「最終的な判断は館長に委ねられた」。「いつもお茶を飲んでほーたらとしている館長だけれど、いざという時には頼れる」。「『僕のご厚意に甘えたらいいと思うな。だって、謝罪の気持ちでしょ？ みんなで使ってっていうなら、備品としてありがたく使わせてもらえばいいんじゃない？ 厚意を突き返すなんて、無粋だよ！』（pp.145-147）と判断する。4)

すると「玄関脇に設置されている、ご意見ボックス用の記入用紙に」『この図書館には、特定の利用者に対して便宜を図る職員がいる。あろうことか、見返りまで要求している。

このような振る舞いは断じて許してはならない！ 菅原麻衣をクビにしろ！』(p.149)と書かれた用紙が入っていた。

菅原くんの対応に落ち度がないのはみんな分かっている、という「館長は、いつもの緩みきった表情はそこにはなく、どこか精悍な顔をしていた」。麻衣はカウンター業務から外れ、『僕はこういう場面でしか活躍できないからね』(p.150)と館長は対応を指示する。マネージャーの彩は、該当の利用者が来館したら事務所に内線を入れるように指示し、静かに利用しているうちは、ことを荒立てる必要はありません、と注意する。麻衣は、事務所での作業、選書や除籍の手伝い、資料の装備などの業務をこなしていた。その後、休暇を取った翌日に麻衣が出勤すると、館長は、今日からカウンター業務に復帰して大丈夫という。昨日、例の利用者が来て、館長を出せ、とカウンターで大騒ぎし、麻衣をクビにしたのかと、カウンターの職員に詰め寄った。すると、「高梨のおじいちゃん」(他の利用者)が大激怒し、その勢いに圧倒されて帰って行った。「久しぶりに就いたカウンター業務は、最初から何事もなかったように通常通り」で「麻衣はデータベースと格闘しながら、平穩であることの幸せをひとり噛みしめていた」(pp.165-167)。

f.電話での督促へのクレーム

男性職員の岸本要が、利用者からの電話に対応していると、「督促がしつこい」というクレームを伝えられる。「返却期限が過ぎてしまった利用者に対して、城北区ではメールでの督促を行っていた。しかし、アドレスの登録がない場合や、長期延滞、次の予約が入っている等、場合によっては電話での督促業務を行うこともある。この仕事は全員でやる決まりになっていて、週頭に件数が均等に割り振られていた」。「この電話代だって税金だろ？無駄遣いしやがって！」と、收拾がつかなくなったのを見かねて、館長が代わって対応してくれた。要は、館長って、何故か督促業務が好きで、他の業務には関心がないのに督促だけは、恐ろしい手際で回収しちゃう (pp.215-216)、と館長を評する。

4-5. 図書館に特有な事案

a.図書館用語

麻衣は、出勤した日の館内研修で、マネージャーの彩に「図書館では本棚のことを書架って呼ぶ」他、特有の図書館用語がある、ことを伝えられる。本の背表紙の下面には、二段に分かれた青色のシールが張られており、「枠の上の段には、五桁の数字」があって『ここに書かれている数字が請求記号。本の住所っていったらイメージしやすい』『この数字を基に『配架』——つまり、返却された本を書架に戻す作業をしていく』『請求記号はその本に書かれている内容を示していて、請求記号の付与方法は日本十進分類法で決められている』(pp.32-35)と伝えられる。

詩島図書館のある城北区は、「所在館方式」をとっていて「他館で借りた資料が詩島図書館で返却された場合、その資料は借りた館へ返るのではなく、詩島図書館の所蔵になる」という。「詩島図書館では、絵本コーナーの近くに手芸や料理の本が展開されている。子どもが本を読む姿を確認しながら保護者の方が本を探せるように、と意図的に配置している

のだ。それは、子どもの声を気にする一般利用者への配慮でもある」。また、手芸コーナーは、ちょっとずつ置いてある本が違い、『『城北区の資料は風任せなんです。だから、利用者の借り方によってどんどん棚が変わっていくんですよ。館毎に特色が出るので、色々な館を巡るって人の話も聞きます』』（pp.235-236）と、麻衣は、利用者に説明している。

本の返却作業では、「IC タグを読み込んで、データが在庫になっているかをチェックしていく。返却処理が正常に行われないと、データには貸出状態のまま書架へ戻ってしまうのだ。そういったミスを防ぐために、別々の人間で二度返却を掛けるのが城北区の決まりになっている」（p.107）ことを麻衣は、知らされる。

また、腰が悪いのは職業病で、ギックリ腰とか多く、麻衣は「仕事で同じ姿勢を保ったり、本を抱えて背中を反らせたりすると、たまに腰に痛みが走ることがあった。幸い一瞬で痛みは消えるので、それほど深刻には捉えていなかった」が、女性職員の菜穂に、注意するよう伝えられる（pp.202-203）。

国立国会図書館が話題になった際、「図書館の運営は簡単にいうと、開架式と閉架式で分かれている。来館者が直接手に取って資料を確認できるものが開架式。一般的な公共図書館等は、こちらの方式を採用している。それとは逆に、来館者の手の届かない書架に資料を置き、依頼を受けて職員が資料を提供する方法を閉架式と呼ぶ」（p.245）国会図書館は閉架式で、国際子ども図書館も開架はごく一部だということを、麻衣は教えられる。

b.相互貸借

図書館間の相互貸借について、このストーリーでは、専門的な業務として扱われている。麻衣は、「事務所の中へ入ると、ぎっしりと本の詰まったコンテナ箱を前に、腕を組む小夜子と目が合った」。仕分けを手伝ってくれるよう、小夜子から依頼され、「言葉選びこそ遠慮がちだけれど、その瞳には強制力が宿っている。大量の本をひとりでは処理しきれないのだろう。麻衣にはそれを断る理由もない」。「相互貸借は、麻衣が以前から気になっていた仕事だ。いい機会だから、疑問に思っていたことを聞いてみよう。麻衣は、小夜子に指示を受けながら、そのタイミングを待った」。相互貸借は、「自治体の枠を超えて資料の貸し借りをしましょう」って制度で、『『予算の都合上、一つの図書館で買える資料は限られてるもの。要するに、お互いの足りない部分を補いましょうって感じかしら』』と小夜子は説明する（pp.238-239）。

「探している資料の所蔵が自区にない場合、所蔵している自治体に依頼をして、資料を提供してもらって制度を相互貸借という。利用者はその資料を所蔵している自治体までわざわざ足を運ばなくても、最寄りの図書館で借りることができる便利なシステムだ」。「読んで字のごとく、『お互いに貸し借りをする』というこの業務の担当は、図書館の仕事の中でも花形といえるだろう。館の窓口として他の自治体とやり取りをするのは、ある程度の経験と実力と交渉力がないと任されないのだ」。詩島図書館では塔子がメイン担当で、サブ担当レファレンスが得意な小夜子となっている。麻衣は、小夜子と『『正直な所、図書館で働くまでそんな制度があることは知りませんでした。棚にある資料しか借りられないのかと

……』『調べ物をしたりする人じゃないと、あまり知る機会もないからね』という会話をかわす。「普段図書館を利用している人でも、このシステムを知っている人は意外と少ない。探している情報があったとしても区内の資料だけで賄えることが多く、依頼されるのは専門的な研究をする場合や、資料を指定しての問い合わせがほとんどだ」「相互貸借を利用する場合には、様々な条件や決まりがあるので、一般的な貸し出しに比べて提供までに手間や時間が掛かってしまう。自治体の規定によっては、リクエストが受け付けてもらえない場合もあるくらいだ。軽い気持ちで頼むには、少しハードルが高いかもしれない」。相互貸借の送り状は、近隣区をはじめ都下、隣県のものもある。『その自治体にしかない資料って結構あるのよ。貴重かどうかはあまり関係がないわ』と小夜子がいうように、求められている資料に統一性はなく、昔に流行った怪しい健康法の本やタレント本、社史、楽譜、などバラエティに富んだラインナップとなっている (pp.239-240)。

c. 国立国会図書館・国際子ども図書館

先の相互貸借の話題の続きで、「『どこの自治体でも所蔵してない場合はどうなるんですか?』」との麻衣の質問に、小夜子は、「『その時は、国会に問い合わせするしかないでしょうね』」と答える。国会議員がいるリアルな国会と勘違いした麻衣に対して、小夜子は、国会とは、「国立国会図書館」のことだと告げる。(pp.240-241)

この図書館については、「東京都千代田区永田町に中央館を置く、文字通り我が国の国立図書館だ。国会議員の活動調査、情報提供を補佐するという重要な任務を担う他、行政や国民のために様々なサービスを行っている」。「国会図書館は納本制度に基づいて、国内で出版されたすべての出版物を収集、保管していると聞いたことがある。つまり、この国で流通している本は、義務として国会図書館へ納入されているということだ」と紹介されている。小夜子は、「『そうね、完璧に「すべて」ともいえないのだけれど、おおよその資料は所蔵されていると考えていいと思うわ』」(p.242)と、麻衣に説明する。絵本なら「国際子ども図書館」の方に所蔵されているかもしれない、と聞いた麻衣は、子どものころに見た絵本を探しているという、レファレンス質問に対応するため、上野の「国際子ども図書館」を訪れることになる。国立国会図書館は閉架式で、国際子ども図書館も開架はごく一部であることも紹介されている。

4-6. 職業としての図書館職員・司書資格

麻衣は、「就活に失敗し続けて、破れかぶれの気持ちで受けた面接」(p.12)で、図書館に採用される。「長期に渡ってここで働くつもりは毛頭ない。あくまでも、きちんと就職するための繋ぎのつもりだ」(p.16)と考えていた。「就職活動を始めてからの一年半ほどは、ずっといっぱいいっぱい」で、「面接で全存在を否定され、自分がまるで無価値なのだという烙印を押された気持ちになった」(p.45)。麻衣は、就職に対して、「ただ平凡に正社員として就職して、金銭や契約期間に悩まずに、つつましく日常を送りたいだけなのだ。普通に働いて、普通に暮らしたかった。だから事務職に就きたかった。他に高望みするような希望はない」と思っていたが「ただ就職したいという気持ちだけでは、全然足りなかったの

だ」(p.100)ということを理解した。

図書館で実際に、一日、仕事をしてみると、麻衣が「自分の持っている『図書館の仕事』というイメージが実際の現場とは乖離していることに気づいた。麻衣の中で図書館の仕事というのは、静謐な空気の中、静かに微笑んでカウンターに座っている——というどことなく優雅で上品で楽な仕事という印象だった。もしかすると、案外大変な仕事なのかも知れない」(pp.28-29)と感じた。働きはじめて一ヶ月すると、「働いてみて、いかに己が無知であるかを思い知った。利用者のちょっとした問い掛けにも、即答できない自分が口惜しかった」(p.59)と、麻衣は感じていた。

待遇に関しては、『『図書館で働いている』』という、公務員と思われがちだが、実際は違う。年度毎に契約書を交わす非正規雇用なのだ。詩島図書館の場合は、館長だけが区の職員で、他のスタッフは業務委託を受けた会社に所属している。近頃ニュースで話題にもなっているが、非正規の図書館員の給料では貯蓄もできないのが現状だ」(p.159)というように、館長のみが区の職員で、他は委託会社のスタッフ、という設定になっていることをすでに紹介した。

前章で取り上げた作品のように、「時給〇〇円」という表現は出ていないが、男性職員の鮎川智也は、はじめて出勤した麻衣に対して『『図書館の仕事ってイメージ以上にやることある』『給料だって恐ろしく少ない』』(p.17)といている。その後も、智也は、ここの給料じゃ『菜穂さんみたいに扶養内で働くとか、要くんみたいに実家暮らしなら何とでもな』るが、『自分みたいに独り暮らしだと贅沢は無理』といい、「麻衣はまだ満額の給料明細を見ていないから詳細は分からないが、確かに智也の指摘通り、この仕事の給料は安い。ざっくりと計算しただけでも、ひとりで暮らしていくのに十分な額だとはいえなかった」と思っている。智也は『『人生使い潰されてるな』って、結局、足元見られてる』と感じており、「欲しいものを手に入れたい。けれど、それを捨てても、好きなことで働きたいと思う人もいるのだ。それは報われない初恋のようなものなのかも知れない、と麻衣は思った」(pp.86-87)。

麻衣は、「詩島図書館で働き始めてからも、求職サイトを眺めては履歴書の送付を続けていた。そのうちの一社からは書類が通って、面接通知が届く (pp.69-70)。しかし、前述の「キーボードの並び」「羊水の温度」などのレファレンスを体験するうち、就活で「必要ない、要らない、役に立たないと言われ続けた自分を」他の職員がサポートしてくれ、マネージャーの「彩は『ずっといて欲しい』』といってくれた」「言葉が麻衣の心に根を下ろし始め」(p.101)る。レファレンスの成果が、「リラックスの湯」につながった銭湯を、ルームシェアをしている夏海と訪問し、夏海に『『麻衣はもう、立派に図書館の人だねえ』』『最初は就職するまでの繋ぎってスタンスだったけど、最近じゃやりがい感じてるみたいだし。さっきのやりとり見てても、麻衣が仕事で頑張ってるっていうの伝わってきたもん。意外と天職だったりしてね』』といわれ、麻衣は「図書館の仕事は一筋縄ではいかないことが多いが、だからこそ面白い。自分にはコツコツやる一般事務のような仕事が向いていると思

っていたけれど、人と接する仕事も、案外楽しいものだ気付いた」(pp.158-159)。「麻衣の腹はもう決まった。この先どんな展開になろうとも、許される限り詩島図書館で働きたい」(p.165)と考えるようになる。

その後、国際子ども図書館へ、やはり夏海とともに出向いた際、『図書館で働くのは、ちゃんとした就職先を見付けるまでの繋ぎってスタンスだったじゃない？ でも、銭湯のことといい、今日のことといい、立派に図書館の人だなんて。自分の休日を利用して、仕事のために……誰かのために行動をするって、中々できないよね』といわれ、麻衣は、『自分でも不思議だなーって思うよ。今までの私なら、ここまで仕事にも、他人事にも首を突っ込んだりしなかつたらうし。でも、なんだろう、あの人たちと一緒に仕事していくうちに、自分がどんどん変わっていくんだよ。働くことの楽しさっていうのが、ようやく分かった気がするの』詩島図書館での日々は、驚きと発見に満ちている』『毎日が騒々しくて、楽しくて、あっという間に過ぎていくの。変わり者ばかりで、大変だけど、刺激的で、興味が尽きなくて……私、この仕事が好きだって、気づいたの！』(pp.264-265)と答えている。

一方、待遇に関してみると、必ずしも、明るい展望が示されることにはなっていない。図書館で働くのもいいことばかりではなく、年度毎に契約書を交わす非正規雇用で、館長以外のスタッフは業務委託を受けた会社に所属しており、「近頃ニュースで話題にもなっているが、非正規の図書館員の給料では貯蓄もできないのが現状」で、麻衣は、夏海とルームシェアをしているし、手芸で少額の稼ぎはあるが、病気になったら一巻の終わり、と感じている。「契約はよほどのことがない限り更新されると聞いているが、それだって確実とはいえないだろう。つまり、安定がまったく約束されていないのだ」(p.159)という状況である。図書館という職場で仕事の内容に関する充実した思いを実感し、それによって、麻衣のモチベーションが上がっても、その職業に対する待遇が好転する見通しは、ストーリーの中では示されていない。実際の図書館現場で起きている、若い職員のやる気を食いつぶしているような実態がそのまま描かれている。

司書資格に関しても、麻衣は、マネージャーの彩から夏の予定を尋ねられ、『菅原さんが司書講習に参加するのなら、他館からヘルプを頼まなくちゃって思ってた』(p.179)といわれる。司書資格について、麻衣は、『大学の時は必要ないと思って、結局取らなかつたんです』本来なら、図書館で働くつもりなど毛頭なかつたのだ。「在学中は一般職として事務を希望していたし、自分の将来には必要ない資格だと思っていた。とはいえ現状を考えると、あの時に取っておけばよかったかな、と少しだけ悔やむ気持ちもある」(pp.182-183)。彩は、司書資格持っていると、少しだけお給料が上がる、と説明し、麻衣は「うっすらと予想していたが、やはり資格があるのとないのとでは待遇が違うようだ」と感じる。もっとも、智也は、過度な期待は禁物、と言い、彩も、金額としたら微々たるもので、誤差の範囲、気づかない程度、雀の涙、かもしれないけれど、増えることは増える、と伝える。麻衣は、それって、ほとんど増えないってことでは、と思い、彩は、吹けば飛

ぶくらいの額かしらね、という (pp.183-184)。

サブマネージャーの塔子は、『司書講習の受講料は個人負担だし、講習は大学が夏休みの期間みっちりとおるんですよ。だから、その期間は働けないしお給料も出ません。勤怠上は欠勤扱いになりますけど、後々の人事で不利になることはないから安心してください……って一応参考までに』と説明する。麻衣は、それでは、メリットはないに等しく「身銭を切って資格を取っても、増える収入は微々たるもの。その上、夏の間は無収入で勉強がみっちり——と聞いては食指が動くはずもない」と考える。彩は、現場でなんとなくやってくる仕事により深く理解できるようになるし、知識も増える、『書を司る資格』って響きも、格好いい、というが、要は、俺も司書資格は持ってないけど、特に不自由してないし、「本当に学びたい」って思った時に受講したら、どうかと提案する (pp184-185)。

この図書館では、司書資格取得をめざす勤務者について、一定のフォローをする、という体制になっていて、資格をめざして司書講習を受講する人がいた場合に、欠勤扱いではあるが、他の館からのヘルプを要請できる、職場にいる者が司書資格を取ろうとすることを支援する体制ともいえる。しかし、収入はひとりでの生活を支えるのに十分なものとはいえず、こうした状況が、「図書館で働く人間は、他館を見ても圧倒的に女性が多い。男性がいないこともないが、『本が大好きです!』というタイプが多く、要のような体育会系の人間は麻衣の知る限りはない」(p.181) ことにもつながっている。

「詩島図書館での日々が、関わった人々が、自分を大きく成長させてくれたのだ。確かに、この仕事は薄給だし、体力が必要だ。けれど『つまらない仕事だ』と切り捨ててしまうには、あまりにもご褒美が多すぎる」(p.274)と感じた麻衣は、マネージャーの彩に、『私、夏の予定決めました』(p.276)と宣言する。しかし、待遇面については、結局、明るい展望は見えないままで、ストーリーが、終わってしまう。

注

- 1)端島凜『図書館は、いつも静かに騒がしい』三交社、2017.7
- 2)端島凜『図書館は、いつも静かに騒がしい』三交社、2017.7、裏表紙カバー、に記載。
- 3)1995年に公開された、スタジオジブリ制作の『耳をすませば』のことかと思われる。
- 4)区の職員である図書館長が「いざという時には頼れる」存在として描かれているが、過去には、「市役所から新しい館長で来」た人物が「やっぱり左遷みたいなもんか」とつぶやいて、職員に批判されている例もあった。

篠原ウミハル『図書館の主①』芳文社、2011.8、pp.73-74

5. おわりに

「1. はじめに」で紹介した「西野七瀬」が所属するアイドルグループ「乃木坂 46」は、2017年の「第68回NHK紅白歌合戦」において『インフルエンサー』のパフォーマンスを披露した。1)日本語では「影響を及ぼす人物」2)というのが基本的な訳であるが、その「乃木坂 46」のメンバーが、出版物の売上に大きな影響を与えていることが報じられた。メン

バーを文庫本の表紙カバーに起用した「乃木坂文庫」シリーズが、それまで、停滞していた文庫本の売上を急増させた。3)2017年の「全国図書館大会」では、文藝春秋の「松井清人社長」が講演し、図書館での文庫本の購入・提供を抑制するように発言したことが、多くのメディアで扱われた。4)その一方で、多くの図書館で、配慮が必要な利用者グループのひとつと認識して、専用の「YA（ヤングアダルト）コーナー」を設置している中・高校生が、「乃木坂46」のメンバーがカバー写真に使われているというだけで、文庫本を購入しているという実態が明らかになった。図書館と出版物の売上との関係についても、より多様な観点からの検討が必要なのではないか。

フィクションに登場する図書館について、今回取り上げた作品で、さまざまな事例が扱われている「レファレンスサービス」については、コミック『夜明けの図書館』で、その多様な実態が、紹介されている。5)また、クレームや問題利用者への対応については、実際に図書館に勤務している作者によって書かれた、第59回2013年江戸川乱歩賞作品『襲名犯』でも扱われていた。6)後者のように、図書館でのトラブルや利用者からのクレームなど、図書館にとってネガティブな印象を与える要素が作品に取り上げられることで、図書館のイメージが変化していくことも考えられる。7)図書館職員の待遇については、『みさと町立図書館分館』は、地方在住で、「時給七〇〇円の契約職員」だが、親と同居していることで、それほど困窮した状況とはなっていない。『図書館は、いつも静かに騒がしい』でも、都市に居住しているものの、女性の友人とルームシェアしており、ひとりで暮らしていくのに十分な額だとは言いえない、図書館の収入でも、なんとか生活が成り立っている。しかし、図書館や図書館員に対して、ネガティブな印象をもたらすようなこうした事案は、今後、図書館現場において、さらに増加していくとも考えられ、フィクションの作品でも、これまで以上に扱われるようになっていく可能性がある。

アイドルとして活動し、女優としても様々な作品に出演してきた小泉今日子は、2018年に入って、事務所からの独立などがニュースに取り上げられた。8)彼女は、かつて、その発言によって、とある出版物の売り上げが増加した、と報じられたことがある。9)アイドルの発言が社会的な影響力を有する事例とみることもできよう。冒頭で「乃木坂46」のメンバーである、「長濱ねる」のコメントにふれたが、それは、彼女の図書館に対する見方が、「表面的で、『レファレンスサービス』『課題解決支援サービス』など、図書館サービスの多方面への展開がみえていない」などと、批判したかったからではない。フィクションの作品では、作り手に表現の自由があるのと同じく、図書館についての見解も、明らかな事実誤認をのぞけば、制約なしに語られるべきものである。その内容は、現在の図書館や、これまでの図書館サービスの実態を、反映したものなのである。

今回取り上げた作品は、現実の図書館現場で雇用形態が多様化していることを反映して、正規雇用以外の職員が活躍するストーリーになっていた。こうした事例は、これまで、あまり多くはなかったが、10)実際の図書館状況の変化により、今後はさらに増加していくと思われ、実態を注視していきたい。

注

1)作詞：秋元康 作曲：すみだしんや

2017年12月30日に発表された「第59回日本レコード大賞」を受賞している。

2)「インフルエンサー」『日本大百科全書』(ニッポニカ)

(<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001050311295>)

3)「創刊46周年を迎えた講談社文庫が、“46”という数字の御縁から『乃木坂46』とコラボレーションフェアを開催します。メンバー1人1人を、46作品のカバーにひとりずつ起用。書店店頭でしか買えない、スペシャルカバーバージョンで登場！」

(<http://kodanshabunko.com/nogizaka-bunko/index.html>)

「黒い昼食会 文庫のカバーが効き目なのだ！」『本の雑誌』2018.1、pp38-39、では、「乃木坂カバーの講談社文庫は売れてるでしょ？」「もう中身は関係ないですよ。カバーだけで売れる」というやりとりがあった。

また、「SNSの投稿の中には、『全部(46冊)購入した』という“強者”も見受けられる」「反響は大きく、フェア開始直後の3連休にあたる11月3～5日では、人気メンバーの担当作品を中心に、店頭で売り切れになる書店が相次いだ」と、報じたメディアもあった。

「講談社『乃木坂文庫』フェア好調 『46』尽くしのコラボ」『ITmedia オンライン通信』

(<http://www.itmedia.co.jp/business/articles/1711/21/news071.html>)

4)「文庫本『図書館は貸し出さないで』文芸春秋社長、要請へ」『朝日新聞』2017.10.12(朝刊)、p.38

「前日に朝日新聞紙上で、松井社長が話される文庫本と図書館についての内容が報道されたことで、当日はメディア各社からの取材要請が殺到、この問題への関心の高さがうかがわれました」との報告が、『図書館雑誌』に掲載された。

持谷寿夫(株式会社みすず書房)「第21分科会 出版と図書館 公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」『図書館雑誌』2018.1、p.28

5)『夜明けの図書館』の著者によるエッセーが『図書館雑誌』に掲載されている。

桒納タオ「新春エッセー 理想の図書館を目指して」『図書館雑誌』2018.1、pp.12-13

出版社(双葉社)の『夜明けの図書館』サイトでは、「レファレンスサービスって何!?!」「ストーリー&見所紹介」「作者紹介&インタビュー」「登場人物紹介」「図書館司書・応援&感想コメント」「書店員・応援&感想コメント」「協力:吉田倫子紹介」などの内容が公開されている。

(<http://www.futabasha.com/yoake/>)

ストーリーの監修に協力している、吉田倫子は、「作品について基本的なやり取りは、必ず担当編集者を通して行っている」理由として、「図書館団体主催のとある作家の講演会の質疑応答の経験。すでに図書館界からの作品に対する批判にナーバスになっていた作家が、会場からの質問に気分を害して席を立ってしまった現場に居合わせた」ことと、「学校図書館を舞台にした小説を、作家が図書委員や学校司書と一緒に作るプロジェクトに関わった

こと。担当の編集者を間に入れず、複数の人の多様な意見を直に一人で受け止めるその作家のメンタルのタフさに内心舌を巻いていたのだけれど、だんだんその人が書けなくなっていってのを目に当たりにした」ことをあげている。

(<http://www.futabasha.com/yoake/08.html>)

こうした関係者の抑制のきいた、作者との距離のとり方が、2011.10に、コミック第1巻が刊行された後、2017.10には、コミック第5巻が刊行され、連載が継続されているように、長期にわたって作品の発表が続けられている一因となっている、といえるのではないか。

6)竹吉優輔『襲名犯』講談社、2013.6→講談社文庫、2015.8

著者の竹内優輔が、牛久市立図書館名誉館長に就任したことが、報じられている。

「牛久市教委 竹吉優輔さんが図書館名誉館長/茨城」『毎日新聞（地方版）』2016.10.27

(<https://mainichi.jp/articles/20161027/ddl/k08/100/122000c>)

7)たとえば、「貸した本が戻ってこない『未返却本』への対応に公立図書館が頭を悩ませている」ことが、報じられた。

「『本が帰ってこない』悩む公立図書館」『日本経済新聞』2018.2.6

(<https://www.nikkei.com/article/DZNXZO26523040V00C18A2CC0000/>)

8)「小泉今日子、円満独立 個人会社でしがらみ離れ活動」『日刊スポーツ』2018.2.2

(<http://www.nikkansports.com/entertainment/news/20180202000065.html>)

9)小泉今日子のインタビュー記事で、「1980年代中盤にはJ・D・サリンジャーの1951年発表の小説『ライ麦畑でつかまえて』をラジオ番組で紹介し、ベストセラーになったこともあった」とされているものがある。ただし、この部分は、小泉今日子の発言ではなく、インタビュアーのコメントである。

「『なんてたってアイドル』を歌うのは嫌でした 小泉今日子 30年の軌跡 ライター：成松哲」『日経エンタテインメント』2012.4.2

(https://style.nikkei.com/article/DGXNASFK2703M_X20C12A3000000?page=2)

10)2011年に放映されたテレビドラマ『森村誠一サスペンス 破婚の条件』で、図書館に勤めているという設定の女性職員が「だってショックですよ。正規職員っていうのは、みんなあんなにもらってるなんて」「いまさら、何いってんのよ。司書なんてきこえはいいけど、結局あたしたちはパートの職員じゃない」「だけど手取り10万じゃ、暮らしていけません」という会話があったことを指摘した。ただし、この部分は、原作の小説にはない。

佐藤毅彦「ライター出身作家の描く図書館 北森鴻のケースについて 図書館はどうみられてきたか・12」『甲南女子大学研究紀要文学・文化編』vol.48、pp1-12、2012.3

(本文中で参照したwebページは、2018年2月の時点で公開されていたものです)